

学会報告

ブダペスト会議からプリシュティナへ

小田 壽典

前年(1996)の6月に、「国際アジア・北アフリカ研究会議(Budapest in July 1997)」の開催にあたって、国際敦煌プロジェクト(ロンドン)の「敦煌・トゥルファン=シンポジウム」を組織したいと招請があった。シンポジウムは、第一部 20世紀におけるシルクロード考古学、第二部 発見物に関する国際的学術研究からなり、後者の文献研究に関しては敦煌・トゥルファン出土の文献類の、とくに用語と翻訳の諸問題について取り上げたいと、組織者のウィットフィールド Dr. S. Whitfield(London)とラシュマン Dr. S. Raschmann(Berlin)の両女史の連名で案内があった。そしてラシュマン女史の手書きで、私には中央アジアの疑偽伝典の「ウイグル語八陽経」のようなものを主題にして原稿を用意して欲しいとの依頼であった。

さてこの会議は、1873年に国際東洋学者会議としてパリに始まり、かつて東京・京都では「国際アジア・北アフリカ人文科学会議」の名称で第31回(1983年)大会が行われた。その後、さらに International Congress of Asian and North African Studies(略称 ICANAS)と名を替え、今回のハンガリーのブダペストにおいて第35回大会(1997年7月7~12日)となった。なお、このあとプリシュティナ大学(ユーゴスラヴィア)のニメトラフ・ハフィズ教授の招待

があって、7月13日から16日にかけてコンヴォ自治州まで旅行した。あわせて簡単な見聞記をつけ加えたい。

1. ブダペスト会議

大会は1997年7月7日から12日である。5日にミュンヘン経由でブダペストに夜到着し、宿泊所に指定されたコロナ・ホテルにはいった。翌日(日)の午後が登録日時であった。朝食前市内を散策し、ホテルから国立博物館前、アストリア・ホテルよりカーロイ通り、デアーク・フェレンツ広場まで歩き、コッシュート・ラヨシュ通りにでた。エルジェベート橋のところではしばらくドナウ川の景観を観察した。自由橋左岸のブダペスト経済大学が ICANAS の主会場である。夕食はホテル近くの半地階のレストラン「マジアル・フサール」にはいった。チェロ弾きのハンガリー音楽に耳を傾けながら、ゆったりとワインを味わった。

7日(月)午前10時近く、大学ホール横のロビーで京都の西脇常記さんと出会った。そこではラシュマンとウィットフィールドが午後から始まるシンポジウムのプログラムを再調整していた。11時少し遅れて大ホールで開会式が始まったが、すでに満席で多くの立ち見の人びとのなかにはいった。壇上の列席者は以下の通りである。

事務総長 イヴァーニイ T. Iványi
 名誉会長 バザン L. Bazin
 名誉会長 ハルマツタ J. Harmatta
 名誉会長(前会長) 趙令揚 L. Y. Chiu
 会 長 ハザイ G. Hazai
 ハンガリー大統領 ゲオンツ Árpád Göncz
 ヨルダン皇子 ハッサン El Hassan bin Talal
 ハンガリー外務審議官 カダル L. Kádár
 名誉会長 サイナー D. Sinor
 作 家 サボー M. Szabó



議事堂にて 大統領(中) ハザイ(右)

まず前会長の挨拶に始まる。それからハザイ氏の開会の辞があり、ハンガリー大統領のハンガリー語(英訳)の祝辞とヨルダン王子による英語とアラビア語(英訳)の演説が続いた。大学の地階は食堂になっている。三階建ての長方形の建物はドナウ川に面した入り口をはいと、マルクスのブロンズ座像の大ホールとロビーに通ずる。二、三階は吹き抜けになった大ホールを囲むように回廊と教室、研究室が並び、さらに長方形の両端まで回廊は伸びている。石造建築の床は敷石 80センチ四方のはめ込みであり、回廊の幅は4メートルくらい、一直線に200メートル近くはある。「敦煌・トゥルファン = シンポジウム」は3階の E-324 教室で、精々40人ほどまでの小部屋である。初日の分科会は午後2時より始まった。夜は7時

から数キロ離れたドナウ上流左岸の国会議事堂ホールでゲオンツ大統領の歓迎レセプションが行われた。翌日(火)の夜6時からブダ地区の日本大使公邸で田中大使の主催するレセプションがあった。これには大会議長のハザイとフランスからのバザン夫妻ほか、いくたりかの主要メンバーも招待されていた。

シンポジウムの初日、バザン夫妻と偶々隣り合わせだった。名乗りをあげると、かつて京都に三カ月逗留して過ごした日々を懐かしくトルコ語で話してくれた。10日(金)の午後、大学ロビーでは顔見知りの石塚氏(北大)にであった。彼は本会議の評議員のひとりでもあり、ハザイ氏のために持参した七宝焼のみやげを渡してくれないかと依頼した。快く引き受けてくれたのはありがたかった。次回の会議主催国の選択などの議題で彼はいままでハザイといっしょだったらしい。ちょうど30年前、藤枝晃先生(のち彼の義父)の紹介で旧東ベルリンの東洋学研究所を訪問したとき、私に対応したのがハザイであり、ツィームを紹介されて今日まで交流を続けることができた。今回のシンポジウムの要請がツィームの愛弟子であるラシュマン女史であったから、義理を果たすつもりで参加したが、正式招請状のプレジデントがハザイであることも私には感慨深いものがあった。昨年ツィームからハ



ブダペスト経済大学と筆者

ザイ65歳の退官を記念して出版物の祝辞に連名のひとりに加えてくれる話があった。ハザイ氏には偶然登録日に入りで、また日本大使公邸で挨拶を交わしたが、用意したものを持ち合わせなかった。今日が会議場へ来るのも最後と思っていた矢先、石塚氏と鉢合わせしたのはまことに僥倖であった。

さてその前日の9日(水)にはドナウ湾曲部一日観光ツアーに西脇さんらといっしょに参加した。大学前から観光バスが出て、デアーク・フェレンツ広場のルーテル教会から左手のカトリック教会前を通り、国鉄西駅そしてアルパード橋を渡った。旧ブダ地区を過ぎる頃からアパートの林立はまさしく社会主義の恩恵を思い起こさせると添乗員は解説する。ドナウ川とティソー川の合流地あたりから見渡す限りの平原地帯にでる。

最初の大きな町はセンテンドレであった。郊外の旧ハンガリー農村を保存した野外博物館にはいった。それからエステルゴムにきた。旧都は16世紀にオスマン・トルコの侵入にあって完全に破壊されたらしい。その後ハプスブルグ家の領有になり、カトリック大聖堂(19世紀)が建つ。ソ連時代は教会の宿舎が駐留軍の兵舎となっていた。バシリカの裏手の城壁からドナウの湾曲部が眼下に一望できる。対岸はスロバキアでシュトーロヴォの町が遠望された。そこか



くさり橋と王宮

らドナウ川に沿って降り、さらに山頂のヴィシエグラードの王宮・要塞跡をめぐり、山頂レストランからエステルゴム方面を展望しながら時を忘れてワイン付昼食を楽しんだ。西脇さんからオペレッタに誘われた。

2. 敦煌・トゥルフアン=シンポジウム

内陸アジアの、いわゆるシルクロード研究は、この数年とりわけ、世界情勢の変化によって国際的にたいへん活発になってきている。シンポジウムは大別して4つのテーマのもとに行われた。

(1) 20世紀における考古学上の発見

19世紀末から20世紀(とくに第1次大戦、1914年まで)にかけて、内陸アジアにおいて探検・調査が行われた。西北中国の敦煌では鳴沙山の千仏洞(とくにペリオ番号17窟)から大量の古文書群が発見された。また天山南路北道のトゥルフアン地方やタリム盆地の遺跡群の発見とそこから多数の古書類の収集成果があった。それらの成果は探検隊を組織した、スタイン(イギリス)、ペリオ(フランス)、グリユンヴェーデル・ルコックなど(ドイツ)、オルデンプルグほか(ロシア)、大谷探検隊(西本願寺)などに



シンポジウム前の耳打ち
サイナー、ウィットフィールド、
ラシュマンとバザン(左から)

より、報告書とともに、遺物・文書等は、各国の図書館、美術館等に収蔵された。今日も研究や目録作成は継続している。大英博物館(ロンドン)、ギメ美術館(パリ)、インド美術館(ベルリン)、エルミタージュ美術館(サンクト・ペテルブルグ)などでは遺物が常設展示される。古書類もまた多くの図書館で研究者に開かれている。

さて今回の発表者は、ハルマッタ(ブダペスト)、ツェラー(テュビンゲン)、サイナー(インドアナ)、メンシコフ(サンクト・ペテルブルグ)であった。ハルマッタはスタインについて、サイナーがペリオに関して探検後の研究活動の逸話を開陳した。ツェラー G. Zeller は「スタイン書簡」が、テュビンゲン大学(ドイツ)図書館所蔵のルート Rudolf von Roth(1821-95)の遺品から発見されたことを紹介した。青春時代のスタインがはじめてロンドンを訪れた頃から前者に宛てた書簡23通(1984年から95年)で、インドでの将来の夢も語られている¹⁾メンシコフ L. N. Menshikov は「オルデンプルグ探検隊の一員」であったドゥディン S. M. Dudin(1863-1929)が無名とみられたが、2回の探検において実際は企画から加わり独自の調査も行い、彼の果たした役割は実に大きかったことをあらためて評価した。

(2) 考古学と美術の研究状況

近年にいたる発掘調査や美術の研究は前述の成果の発展や新しい発見を期待するものである。ジュール S. Juhl(Aarhus)は「新疆トゥルファンにおける中国の発掘」について、中国考古学者による1949年以降の発

掘調査(1959-75,1979)によって得た文書及び木製品は、当時のトゥルファンの住民構成などの研究に役立つと指摘する。ユアン Tsing Yuan(Dayton)は「近年における中国の中央アジア歴史研究」について、現在、中華人民共和国では、どのようなシルクロードに関するプロジェクト研究が進められ、その成果がどんな雑誌に載るかの情報を提供した。クリヤシュトルヌイ, S. G. Klyashtorny(St.-Petersburg)は「敦煌・トゥルファンの突厥文字トルコ語文献研究」を概説した。金石碑と紙文書があり、前者の書法はイエニセイ碑銘に近く、仏教的内容にも含まれる。後者は占書、格言集、軍事指令書などで、ミーラーン文書(軍事指令書)は8世紀末から9世紀初期、残りは9,10世紀とみる。東トルキスタンと敦煌もトルコ語突厥文字の通用圏であり、11世紀まで行なわれた。フレーザー S. Fraser(Evantson)は「敦煌財政文書の解釈問題 美術家への俸給」と題して、浄土寺会計文書(S 77, P 2032, P 2049)を手がかりに10世紀、絵師等に当時、敦煌地方でどのくらいの俸給が支払われていたかを中央と比較しながら論じた。ラッセル=スミス L. Russel-Smith(London)は「敦煌洞窟壁画」について、スライドによりウイグル美術の影響を論じ、マニ教徒の姿を指摘した。グラーチ Zs. Gulácsi(Bloomington)は「トゥルファン遺物の間にマニ教遺産を同定すること」の課題を目標とし、仏教やキリスト教との混成のなかから確かな識別を行うにはマニ教の文脈に照らし、文献的証拠を探し出すことだとする。ヘースナー Ch. Bh.-Haesner(Berlin)は

1) 東方学会報(No. 73, p. 17)にはコータンなどの発掘現場からのスタイン書簡があるように記述されるが、年次からみて執筆者の誤解ではなかるうか。

「中央アジアの混成的美術の実例」(Nanā, Dākiṇī or Avalokiteśvara?)を興味深くスライドで比較して論じた。ベルリンのインド美術館でトゥルファン^{パナー}の総目録を準備中で、そのなかに中央アジアの混成の好例を指摘する。典型的ウイグル様式には太陽と月、狼か犬のモチーフがみえると述べる。

以上、わが国では仏教的視点だけがきわだつシルクロード美術に対して多彩な発表が行われ、また女性研究者の独壇場でもあった。

(3) 遺跡・遺物の保護・協力

このテーマのもとに3名が発表した。ラルミノー G. Larminaux(Paris)の「ユネスコのシルクロード・プロジェクト」では、敦煌壁画の修復をはじめとする最近のユネスコ文化事業について語り、資金面での協力者のひとりとして平山郁夫画伯の名前がたたえられた。プロヴェンコ N. Brovenko(St.-Petersburg)は「サンクト・ペテルブルグ収集品の保存課題」として、大部分イスラム的写本の修復保存について敦煌の保存技術を応用したい話だったと記憶する。服部等作 T. Hattori(London)の「大谷探検隊の遺物の再発見」では、神田喜一郎や松本文三郎の鑑定裏書きをつけたいくつかの大谷探検隊将来品と目される塑像スライドを示して、日本における遺物の再発見の意義を述べた。ただ、資料が配布されず、私自身にはほとんど予備知識がないので迂闊にいえないけれども、会議同席者から示唆を得て、帰国後、同様のコレクションの展示会が東京であったことを知った。すでに故人となった著名な研究者の鑑定書き(?)だけではもはや信憑性を実証したことにはならない懸念をもつ。美術的評価と具体的な当該

将来品である可能性の追求が期待されよう。

(4) 出土文献類の研究

ここでは、すでに『東方学会報』(No. 73, 1997年12月刊)に簡単な報告を行ったので、発表者と標題を挙げ、あとに総括として少し述べてみたい。

ヴォロブョヴァ M. I. Vorobyova-Desyatovskaya(St.-Petersburg)「サンクト・ペテルブルグのペトロフスキー収集品サンクリット写本」、ピノー G.-J. Pinault(Paris)「タクラマカン砂漠からのトカラ語文書」、ブルラク S. Burlak(Moskow)「トカラ字音」、コーン L. Kohn(Boston)「敦煌写本と奉道科戒の展開」、西脇常記 Ts. Nishiwaki(Kyoto)「唐代の護法僧、玄範(生没不詳)」、レック Ch. Reck(Berlin)「ベルリンのトゥルファン収集品のなかにマニ教 *Xwāstwānift* の新断片」、小田壽典 J. Oda(Toyohashi)「いつウイグル文八陽経は訳されたか」、オルメズ M. Ölmez(Ankara)「シルクロード研究における玄奘伝のウイグル訳とその位置づけ」、クラーク L. V. Clark(Bloomington)「ウイグル文書の日付」、セルトカヤ O. F. Sertkaya(Istanbul)「若干の新しいウイグル土地渡契約文書について」である。

流沙に埋もれたシルクロード文化の研究はようやく百年になる。たとえば、ロシア探検隊のクレメンツが将来した契約文書を、『古代トルコ語研究』シリーズ(2)の付録として、ラドロフが「トゥルファンからの古ウイグル言語見本」と題して公表したのは、1899年(ペテルブルグ)刊本であり、ウイグル関係ではこれを嚆矢とする。今日まで出土古ウイグル文献の第一次的研究とそれに伴う第二次的研究の書物や論文を合わせる

ンボジウムの前半の美術的研究もおおむねそのような方向を示唆する。トルコ語突厥文献の年代的概説(クリヤシュトルヌイ)もそうである。仏典類の翻訳に関して、ウイグル語は、イスラーム化以前の、ほとんど最後の伝統をになった。中国の三蔵法師である玄奘の伝記が、どのような術語でウイグル語に訳されたかは興味ある視点である(オルメズ)。また仏典のマイトリシMIT(弥勒下生経類)に関して、トカラ語Aとウイグル語の平行テキストから翻訳と用語の新しい解釈を見つけたことは研究の深化を一層確かなものにする(ピノー)。商業民族のソグド植民者がウイグル人にマニ教をもたらした、またウイグル語仏典の翻訳に深く関与したことはすでに多く論じられている。さらに仏教の源流であるサンスクリット語文献のペトロフスキー写本の全容が明らかになる(ヴォロブョヴァ)日が近いことを祈念したい。

なお私自身の発表にも触れたい!「いつウイグル文八陽経は訳されたか」は絶対年代を具体的に知る手がかりのない事実を、どう位置づけるかの課題である。幸いにもウイグル語仏典写本群のなかでもっとも多くの写本・版本(約百種)が知られ、しかも敦煌の第17窟からロンドンにもたらされた写本(B.L. Or. 8212-104)は完本に近く、比較上、もっとも古いとみられる特徴を有する。そこで、4つの観点:(1)言語的日付(2)ソグド語色(3)写本の素性(4)偽経の性格について論証を試みた。(1)言語的日付については、東方トルコ語テキストの日付の総合的解明に挑戦したデルファーの試論を参

照する。「純粹に言語上だけからすれば、AS1c[すなわち八陽経ロンドン写本]の古さ段階は、進行した状況にみられる」、そして「1cの平均は、940年に割り当てられる(広く見て840~1040年になる)、少なくともこのような設定は例外的ではない」²⁾と述べる。デルファーが進行した状況とみる具体的事実のなかには少しく誤認がある。ウイグル字音のSとšの混同があるとしたが、しかし *ašil*-(301), *törösin* (308) は *asil*-, *tüüšin* が正しいのである。(2)ソグド語色について、この写本は、のちに現れるトカラ語色をまったくもたない。(3)写本の素性について、内容上多くの異語写本と比較できる。同じ敦煌第17窟出土漢文は90点以上あり、900年代の年号をもつものを数点含み、同じくチベット語写本(20点あまり)と似る。我々のテキストはこれらと部分的に一致せず、かえって京都の東寺観智院所蔵本(奈良時代に遡りうる)や同じく敦煌出土のチベット文漢語写本に近い。簡単にいえば、ウイグル語の翻訳地は敦煌の可能性が少なく、むしろトゥルファン地方で比較的古い原本から翻訳されたと仮定しうる。そして八陽経のチベット本とウイグル本にみえる漢字音「陽 yang < 'iang」の方言化: *yang* (当該本: Uig. L₃₈₅), *yan* (チベット文漢語本: Tib. Pt1258₇₉), *yon* (チベット語本: Tib. Pt743₁, Pt745₁), *yo* (ウイグル語本: Uig. K1₃₂₁, B48₁₈)について、一般的にチベット文字の漢字音は敦煌を含む河西地方において長安の標準的方言として9世紀にはじめて生まれた。それは10世紀に河西方言に発展し、そして河西の合法的方言となったという(高田時

2) G. Doerfer, Versuch einer linguistischen Datierung älter osttürkischer Texte, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden 1993: 79.

雄). トウルフアン地方のウイグル人の間にも同様な傾向がある一方, その地方の中国仏教徒は長安の標準方言をまもり, しばらくは經典読誦の発音として維持したであろう. 要するに, 8世紀にもトウルフアン地方へもたらされた漢文原本からウイグル語に翻訳された当該本は, いうまでもなく, チベット王国の敦煌占領時代(781-848)にはトウルフアンは長安との交通が途絶えたために, かつて相当長期にわたって古い長安の標準音が保持され, それを反映したと考えられる. (4)偽経の性格については, 以前に論じたが, 訳文は善悪二元論的イラン思想の影響を受けている. ウイグル人の間にマニ教が優勢であった時代に出現した(森安孝夫)ことを示すにちがいない. ではいつ翻訳されたか. 論理的には, デルファー説を少し前送りして9世紀後半から10世紀にかけてと推定したいが, 確実ではない. おそらく, 原訳に近い写本が敦煌へもたらされ, 偶然にも洞窟中に残ったのである.

ところでオペレッタ劇場はヴルシュ・マルティ広場から川沿いに出たところにあった. ペシュテ・ヴィガドー(コンサートホール)は, ほぼ満席となった. ブダペストは現地マジャール語ではブダベシュテと発音するのが正しく, トルコ語でもそのようにいう. 応用美術館はホテルからそう遠くない. ハンガリーの家具・工芸品などの実用的調度美術が展示されていた. またオスマン・トルコ時代にトルコで作られた絨毯の展示場があり, イスタンブルのトルコ・イスラム美術館(スレイマニエ)に次ぐ, トルコ絨毯が収集されている. ドナウ川はこの数日増水がつづく. 兩岸の車道は冠水し, 交通止めになり, 水上レストランも閉鎖された. オーストリアが, チェコの大雨による

らしい. 船の航行もまばらとなったが, 夜になると, くさり橋や王宮が一斉にライトアップし, 水都の眺めは幻想的であった.

3. ユーゴへの旅行

(1) 列車にて

国鉄東駅の7番線からベオグラードゆきが出た. 「ブダベシュテ」を離れ, ハンガリー平原を縦断してユーゴスラヴィアに向かう. 2つ目の駅キシューケレシュに午後1時17分について. このあたりはブドウ畑が多いが, ときどき麦畑が果てしない平野に広がる. 麦秋の季節であり, 明るい黄色のひまわり畑や青々としたとうもろこし畑と鮮やかな対照をなしている. 2時すぎ, 国境駅ケレピアに到着した. パスポート検査と乗車券の点検があった. ユーゴにはいり, スポティツァを出発したのは, すでに4時過ぎであった. 駅が表示がキリル文字とラテン文字とで表記されている. このあたりにはじゃがいも畑もあるようにみえたが, 列車の中からの想像にすぎない. ヴォイヴォダの町ノヴィサド駅をへて, ベオグラードに到着したのは6時過ぎだったであろうか. ホテルのハイヤットでは, 軽い夕食をすませて部屋にもどると, プリシュティナのニメトラーフから電話がはいり, 30分以内に友人がホテルにゆくという知らせであった. ロビーでしばらく待つと, 中年の男性が近づいてきた. ネナド・ゴイコヴィチ Nenad Gojkovic と名乗った. 明朝に再度きて9時30分のプリズレン ゆきのバスに乗せるから, 安心して欲しいといった. すべてニメトラーフの配慮であった.

(2) ティトーの廟墓

7月13日(月), 8時前にロビーに降りた

ら、すでにネナド・ゴイコヴィチは待っていた。ぽんこつのスズキ軽4輪に我々のバッグ2個をどういれようかと、ドアマンは一瞬戸惑った。インド製スズキの中古車で、ガラス張り全館のハイヤットには不釣り合いであったが、そんなことは気にならなかった。市内の起伏の多い町並みを見ごとに回り始めた。丘陵にあるティトーの廟墓へきたが、9時前はいれないというので、もう一回りして丘に上がった。ユーゴ創建のティトーに対する敬慕の念はいまなお絶えぬようで、いまだパルチザンの同志達が表敬して捧げる花輪が並んでいた。招待してくれたニメトラーフ・ハフィズ氏とは、イスタンブルやアンカラのトルコ語関係学会で知り合った20年来の畏友であるが、詳しいことは何も知らなかった。ホテルをでるとき、ネナドはニメトラーフに頼まれて、ベオグラードの国立図書館から古いセルビア語の語彙集を複写してきたので、手渡して欲しいと紙袋を預かった。ネナド・ゴイコヴィチのクルマの助手席に乗って市内を回る間、それとなく尋ねた。ニメトラーフはプリシュティナ大学の教授であるが、私の行く先はさらに南のプリズレンであることを知った。少なくとも彼を含めて3代、150年はプリズレンに住むトルコの名家であった。

(3) バスにて

バス・ターミナルからトルコ・ユニオン・バス「ビルリク(Birlik)」で出発したのは9時45分であった。バスの運転手にすべて話してあるから、なにも心配はいらないと繰り返してくれた。彼は我々には英語を使った。名刺にはアメリカの会社の営業販売の副社長とあり、Ph.D.と肩書きされている。

彼の親切に感謝して別れた。ボルボ製の2階建てバスは、ニシュNiš(224km)の表示に向かって走り出し、高速道路料金所を抜けると、間もなく交通警察の検問があった。車中のうしろ座席に2人の若い女性がいて、席を移してしばらく話してきた。セルビア人の姉妹で、妹がベオグラードの法律学校へ通っているといい、両親は私たちの行く先であるプリズレンに住み、休暇で帰るところだ。ユーゴは、ハンガリーとは違う景観が展開していたことを列車でも経験したが、南にくだるにつれて、起伏の多い山間部が目につくようになった。しかし耕地はよく開けている。ドナウ川の流域を通り、いくつかの村か町を通過したが、地図上のどこかわからなかった。バスがプリシュティナについたのは、午後4時過ぎであろうか。プリズレンにはまだ1時間はかかる。各所で乗降があったので実際にはもっと時間がかかった。夕方6時頃になっていた。バスを降りて手荷物を受け取ると、そこにニメトラーフが立っていた。早速彼のワーゲンに荷物を積み替えてくれた。運転手に礼をいってワーゲンに乗った。

(4) プリズレンにて

石畳の路地を曲がると、高い板塀の前に止まった。板塀の下部に扉がある。クルマが丁度入るほどの通路になっている。庭木に囲まれた戸口の階段はぶどう棚におおわれている。昨年アンカラに嫁いだ娘さんのアイラが査証の更新のためにきていた。彼女はプリシュティナのトルコ語テレビ局のキャスターをしていた。「ブダペスト会議」について話すうちに、インタビュー番組に出演しないかといい、ニメトラーフも賛成のようであった。たいへんなことになっ

たが成りゆきに任せることにした。翌日、朝起きると、ニメトラーフは庭木に散水している。明日プリシュティナ・トルコテレビ局で録画撮りすることを承諾した。

コソヴォ自治州では人口の90パーセントがアルバニア人で、150万人ほどである。残りのうち、トルコ人が1万4千人、セルビア人(10万)のほか、普通ロム(Rom)といい、トルコ人が Tipki というジブシーと、そしてボスナックといわれるムスリムがいて、トルコ語ではゴラル(山の人)といい、セルビア語ではトルベシュである。まさに多言語社会であることを知った。

昼頃クルマで私たちを散策に連れ出した。まず町の役所に滞在申請をしておくというので、パスポートを渡し、橋のたもとで待つことにした。本人が出頭するには及ばないらしい。プリズレンから数キロ山間にはいると、マラシュ村であった。ビストリツァ川沿いに古い粉ひき小屋があり、さらにユーゴでもっとも古い発電所の跡地だという。いまは一種の博物館となっている。そこをさかのぼると、山間の峡路に古城跡が



プリズレンの橋のうえニメトラーフ背後にイスラーム教のミナレとキリスト教の教会

あり、山頂が見張り所だったという。そのなかにローマ教会のバシリカ(14世紀)があって、いま復元工事が行われている。大きなどんぐりの木が実をつけはじめている。それから町を迂回してアルバニア国境まで行くことにした。18kmほどである。途中道の両脇にたいへん大きな桑の並木がみられた。昔は養蚕の盛んなところであつたらしい。山が迫り川が流れている。写真を撮ると、カメラをしまっておけといった。山の中腹に境界線がみえて、こちらを監視しているからだ。下り坂になって湾曲するところに食事処がみえてきた。ここで軽食にしよう。国境だよといった。道の両脇に大きな分銅状に鉄かぎをつけたコンクリートブロックが集積されている。いざというときこれらで道を塞ぐものだ。

東と南に小高い山並みが連なり、西へ流れる川沿いに町が開けている。オスマン・トルコ時代からの伝承によってスージー詩人^{シャイル}とよばれるモスクがあり、スージーとネハーリーの墓地もある。モスクの尖塔があちこちに遠望されるが、アーチ型屋根やドーム型のキリスト教会も点在する。街の並木や掲示板に顔写真入りで死亡広報の紙片が貼り付けられている。たいてい同じ樹木にいくつもあり、イスラームは緑枠、キリストは黒枠で、十字架にぎぼしのような頭飾りがオルトドクス(正教派)である。広報はなかよく同居している。名前・享年・生年月日ほか経歴なども書かれているようだ。路地の広場に2つ銅像がたつ。初等学



広報

校の教室で、1987年に創立100周年行事が行われた。夕暮れどき、モスクの前に来た。ちょうど礼拝が終わったところで、十人くらいの男性がでてきた。そのなかにニメトラーフの貴兄(1935年生)も交じていた。またすぐ近所に長姉の嫁ぎ先があって立ち寄り、紅茶を馳走になった。老夫婦とその息子夫妻がいて、中二階のある典型的トルコ風住宅だ。そういえば、客室のソファはトプカプ宮殿のディーワーンを縮小したような配列であった。茄子やキュウリの菜園や花園を兼ねた庭の手入れも行き届いていた。アルバニアの山に日が落ち空が淡い紅に染まり、ネオンもイルミネーションもまったくない夕暮れ、住宅の薄明かりのなかに川沿いの道が人混みに溢れる。夏の涼をもとめて老若男女がわき出して来るようだ。まるで祭りのにぎわい、休暇で帰郷した若者たちが久しぶりの会話に夢中なのであろう。セルビア語なのか、アルバニア語なのか見当はつかない。ニメトラーフの家庭でも娘と奥さんが話に熱中しているとき、彼は私を気にしてか、トルコ語で話しなさいと口をはさむ。パッと画面が変わるように、少し耳慣れた言葉の断片が飛び込んできた。食事にも彼は、肉料理は男の仕事とあって炭火を起こし網焼きキャバブや手際よくキョフテ(肉団子)を作り、奥さんが食べる人を演じた。リキュールのラクも水割りにしなかった。

(5) プリシュティナへ

15日(水)、朝9時にプリシュティナに向けて出発した。一家そろって2台のクルマに分乗した。私たちはアイラの運転するワーゲンにのり、ニメトラーフは奥さんと家政婦を乗せた。プリシュティナにつくと、

アイラと私はテレビ局にきた。ゲートの守衛にパスポートを預けた。外来者の通例らしい。4,5階建てのオフィスのなかにスタジオがあり、ほどなく3,4人のスタッフによってインタビューの録画撮りが行われた。番組のタイトルは「世界につながるトルコ語」(*Dunyada Türkçe İlgisi*)と訳したらよいのであろうか。放映は8月28日になるといった。彼のアパートはプリシュティナ大学まで徒歩で15分ほどのところにある。学内の組織については聞く余裕がなかった。いまは休暇のためほとんど学内は機能していなかった。学生はいま7,8人で、秋には15人程度にはなる。オスマン・トルコ語とドイツ語を担当する。彼の義務は週2科目で、博士資格の助手が残りを担当するらしい。彼はかつてマインツに留学し、コソヴォのトルコ民間伝承で学位をとった。ユーゴにおける代表的トルコ語学者である。当地で刊行されたトルコ語の学術と文化の季刊誌、*Çevren* (92号:1974-1992)の主要な編集人でもあった。アパートのあらゆる隙間に蔵書を詰め込み、プリズレンの自宅でも同様であった。アパートの壁に沢山の油絵が掛けてある。奥さんの父親が画家であって、ボスニアのモスタルで暮らしていた。この間の内戦で実家の近くにあるネレトバの石橋が破壊されたと嘆いた。

夕方、郊外にでかけた。有名なコソヴォ会戦(1389.6.15)の古戦場がある。主にセルビア軍に対して、ムラト一世のオスマン軍が戦った。ユーゴ政府によって丘の上に記念碑が建てられてある。彼の話では両軍が互いに追尾しながら丘の上に向かって駆け上がった。そしてついにトルコ軍が勝利した。ムラト一世はその年この地でなくなり、少し離れたところに廟墓のモスクが営まれ

ている。庭に百年以上はへたかと思われる古木が植わる。近くの煉瓦工場から煙があがる。コソヴォ自治州の首府、プリシュティナはいま猛烈な建築ラッシュで、高層アパート群が増加している。アルバニア系住民が急増しているという。翌16日(木)、早朝大きな青年がきていた。モンテネグロ自治州のアドリア海岸のホテルで仕事をしている長男が、夕べ遅く帰ってきたのだっ

た。ニメトラーフの運転でベオグラードの空港に向かった。ニメトラーフは<神の恵み>(アラビア語: *ni'metullah*)、けれんみのない人柄であった。コソヴォは多民族であるとともに、キリストとイスラームの共同社会である。ボスニアの轍を踏むまいとする配慮が随所に見られるように私は感じた。

(1997.12.20 記 / 1998.1.5 補足)